アメリカ童話から 6

青いドア

（クリスマスのお話）

松原至大

お臺所でおなべやフライパンの音がするのでジョニーは眼をさましました。やわらかなベットのぬくもりの中で元氣を出して、もう一度首のところまで、夜具を引きよせました。

その時、ジョニーは、ふつと思い出しました。孤兒院にいた時のことを思い出したのでした。自分といつしよにクリスマスをむかえてくれる人が、ひとりもいないので、泣きたい思いで窓のところに、しよんぼりと立つていたのでした。すると一つの手が、ジョニーの肩にさわつたので、振りむくと、つやのない青い眼が、ジョニーを見つめていたのでした。

その眼は、いつかお會いしたことのあるなつかしいおばあさんのでした。おばあさんは、ジョニーといくらも高さがちがいません。コートによくうつるマフを持つて、白い髪の上には、小さなボネツトをかぶつておいでした。

「今日は。今までの悲しい思いをのみこんで、ジョニーがいいました。

「坊や、お眼にかかれてうれしいのよ。」と、おばあさんがいいました。おばあさんの笑い顔は、やさしいしわでいつぱいになりました。

寮母さんからこのおばあさんが、自分といつしよにクリスマスをむかえて下さるのだと聞くと、ジョニーはうれし

くなりました。荷づくりにかけて行く間も、その足は心臓がうたう歌に拍子をあわせていました。はれやかな聲と笑いとが、長い寮にいつぱいとなりました。

ジョニーは急いで戸だなから、自分の古いスートケースを出しました。

「さあ、坊や、荷づくりはおばさんたちにお願いなさい。」といつて、おばあさんはジョニーを、二階へ連れて行きました。

すつかり支度ができると、ジョニーは自分でそのケースを持つといいました。

「ぼく、もう大きいんですもの。重くはありません。」と、おばあさんにいいました。

ふたりは初めていつしよに、町の電車にのつて、それからいくマイルもバスにのりました。ジョニーはおばあさんのそばに腰をかけて、ほんとうにこのおばあさんの身内になつた氣持ちでいました。だれの子供でもなくなつてからずいぶん長い年月がたつているのでした。幾度も顏を見合わせて、笑いました。このおばあさんと小さな少年とが。

雪がはげしく降つていました。きらきらする明りが遠く遠くなつて、バスがとまりました。ふたりは、バスからおりました。

「しつかりおばあちやんに、ついていらつしやい。」と、おばあさんがいいました。「雪はすべるから、ころばないように。」

急に小さな家が、吹雪の中にあらわれました。そしておばあさんはいいました。

「これがわたしのお家ですよ、坊や。」おばあさんが手さげの中で、かぎを探している間に、ジョニーは、このお家のドアが青いのに氣がつきました。ずつと昔、お母さんがそれをあけてはいつた人は、だれでも幸福を見つけるという「青いドア」のお話を、ジョニーに讀んで下さつたことがありました。

ふたりは、中にはいりました。お家は暗くて、だんろだけが赤々としていました。おばあさんは、石炭をかき立てました。すると、楽しそうなほのおがとびあがつて踊りました。

ジョニーは、これまでにランプをつけるのを見たことがありませんでした。その美しい光が、おばあさんと同じよ

うに古風な、おもしろい家具を照らしました。
「わたしたちは、なにも食べる時がなかつたのねえ。」と、おばあさんがいいました。
その時はじめて、ジョニーはお腹のすいていることに氣がつきました。おばあさんをお手傳いして、市松模様のテーブルかけの上に、ボールやおさらをならべました。
「さあ、坊や。」といつて、すぐに席につきました。
おばあさんは、頭を下げました。
「神さま、あなたさまはご親切に、わたくしに暖い食物をお恵み下さいまして、このかわいい坊やにも、それをお分け下さいました。わたくしどもは、厚くお禮を申し上げます。アーメン。」
多分それは、樂しい火でありました。またおいしい食物でありました――だがジョニーのまぶたは重くなつて、頭はこつくりをはじめたのです。
この小さなおばあさんは、ジョニーを大きな高いベットに連れて行きました。そしておばあさんには自分の子供があつたのではないかと、ジョニーが思つたほどやさしく、ジョニーをふとんに包んで下さいました。
臺所で、おなべやフライパンの音がはじまつたので、ジョニーの眼はふさぐことができないようでした。
ジョニーはベットからとび飛び出して、急いで服を着ました。おばあさんは、もう朝の食事の用意をしたのでした。ふたりはそれをいただきながら、その日のプランを立てました。それはクリスマスの前日のことで、ふたりともすることがたくさんありました。
まずふたりは、暖かに服を着て、一本の木を探しにでかけました。雪の上をざくざく歩きながら、ジョニーはふりかえつて、ドアはほんとうに青いのかとたしかめて見ました。そしてその青は、空の色と同じでありました。
ふたりは、きれいな小さな木を見つけました。それにつもつた雪をはらうと、りつぱな枝となりました。おばあさんは、それを自分で切り落して、ジョニーに引かせて、お家にもどりました。ジョニーは、きれいな青いドアをそれでひつかかないように、氣をつけました。

それを、お部屋のすみの糸車のそばに立てました。その日は、それを飾りつけることで暮しました。それにつけるりんごをみがいたり、とうもろこしをいつたりしました。おばあさんはジョニーに、針と糸をあたえて、ジョニーが食べないとうもろこしをその木にぬいつけました。それからひいらぎの葉の輪飾りを作つて、おばあさんは、ちよう形に結んだ赤いリボンをいくつか探しだしました。葉の輪飾りを、正面の二つの窓にかけた時、ジョニーがまじめになつていいました。

「おばあちやん、クリスマスのお手傳いをしたのは、ぼく、初めてですよ。」

小さなおばあさんは、ほおえみました。

「坊や、これはね、幸福を持つてくるお前の手で作つたものですよ。」

その木は、とてもきれいでした。ふたりは厚紙で作つた星に、すずのはくをかぶせて、それを一番上にむすびつけました。

雪はまた降つてきて、だんだん暗くなりました。ジョニーとおばあさんは、火のそばのくらがりの中にいました。ふたりは、その木を見たり、お互に見かわしたりして笑いました。それは、クリスマス・イブでありました。

おばあさんはそばによつて、ジョニーの手をご自分の手の中に入れました。

「坊や、クリスマスのお話が聞きたくはないの?」と、たずねました。

ジョニーは知つていましたが、もう一度聞きたいと思いました。それでおばあさんがお話になる遠い昔のベツレヘムにいた三人の賢い人と、かわいい赤ちやんとのお話を、しずかに聞きました。

おばあさんがいかにも心をこめて、その赤ちやんのことをお話なさつたので、お話が終ると、ジョニーはこうたずねました。

「おばあちやん、おばあちやんには、小さな子供があつたのですか?」

しばらくの間、おばあさんはだまつておいでした。その眼は、だんろの中の燃える石灰の上にそそがれていました。それは、涙で光つているかのように輝いていました。やがておばあさんは、

「いつしよにいらつしやい、坊や。」といいました。
おばあさんは、手にランプを持つて、ジョニーはその後から、せまいドアを通つて、階段をのぼつて行きました。一番上の小さなドアを、おばあさんが開くと、ちようつがいがきいとなりました。
ジョニーは、床の上に、一つの大きなボールがころがつているのを見ました——色のさめた赤と青のしまでおおわれたボールでした。そこには一つのつくえ、一つのいす、一列の本がありました。
「坊や、どらん。」と、おばあさんがいいました。「わたしには、一人の男の子があつたのですよ。これは、その子のものですよ。でも、それはずつと昔のこと。ああ、その子はよい子でしたよ、あなたと同じで。お星さまのように輝いた眼と、お月さまの光について行つたのだと思いましたよ。ああ、あの子がわたしから離れて行つた時は、お月さまの光について行つたのだと思いましたよ。」
おばあさんは深い息をついてから、またいいました。
「あの子は、いなくなつてしまつたのよ。」おばあさんは、腕をジョニーにまわしました。そしてふたりは階段をおりて行きました。それから後は、ジョニーは、楽しく笑つたり、話しをするようにつとめました。おばあさんを悲しくさせたくなかつたからであります。ジョニーは、おばあさんが「おやすみ」のキスをして、ベットの中に入れて下さるまで、プレゼントのことを忘れていました。ああ、ジョニーがおばあさんのために、この木の上になにかつけてあげるものがありさへしたら。おばあさんはジョニーに、こんなよい日と、こんなクリスマスの幸福とを下さつたのに、ジョニーはなにもおばあさんにおくるものがないのでした。ただこれだけのほかは——
ジョニーはベットからすべり出して、窓のところに自分のスートケースを持ち出しました。そこには月の光が輝いていました。ジョニーは、しまつておいてある財産にさわりました。そこにありました。それをはなしたことはありませんでした。氣をつけて、まくらの下に入れて、眠りました。くちびるに笑いをうかべて。
次の朝、ジョニーが眼をさますと、やつと明るくなつていました。急いで服を着て、まくらの上から小さな贈物をとり出して、となりのお部屋にすべりこみました。すると、ジョニーはびつくりして立ちどまりました。木が贈物で

いつぱいになつていたのでした。

おばあさんは、ジョニーといつしよで、「メリー・クリスマス」といいました。ふたりはプレゼントを開きはじめました。ジョニーは、たくさんのおもちやと本を見ることに夢中になつて、おばあさんへのプレゼントのことを忘れました。やがて思い出しました。はずかしそうにポケットの中から、大切なものをとり出して、おばあさんに手渡しました。

「まあ、金のロケット、坊や?」とおばあさんは、びつくりしていいました。年をとつた指で、氣をつけてそれを開いて、中をよく見ました。

「坊や、これは、あなたのお母さんのですね。」と聲をあげました。

「そうです、おばあちやん。このロケットはお母さんのです。ぼく、クリスマスに、それをおばあちやんに、おあげしたいのです。おばあちやんは、とても僕によくしてくれました——これしかぼくのあげられるものはないのです——そして、ぼく——ぼく、お母さんを思い出します——ああ、うれしい。」ジョニーのくちびるはふるえました。

「ああ、かわいい子。」と、おばあさんは大きな聲でいいました。「お母さんの代りになつて、あなたを大切にしましようね。もしあなたがいつまでもここにいて、わたしと暮すのなら。」

おばあさんはジョニーを、しつかりと抱きよせました。しばらくの間、ふたりの眼は、幸福の涙でいつぱいでした。

「わたしの子供が、またお家へもどつてきたようですよ。」と、おばあさんはいいました。

ジョニーは、はずかしそうにいいました。

「ぼく、ほんとうに青いドアの中に、幸福を見つけましたよ、おばあちやん。」

（ローラ・ブルックス女史の作による）